

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

北米供用種牡馬と言えば、2年連続リーディングの座あり、種付け料30万ドルで供用されているタピットの一強状態にあるが、そんな中にあって「次代のリーディング」の呼び声がかかるといいる気鋭の若手種牡馬アンクルモーが、今回のコラムの主役である。

昨年2歳となつた初年度産駒が363万2314ドルの賞金を獲得。フレッシュマジシャンサイヤーチャンピオンの座に就いたのみならず、2歳リーディングサイヤーのタイトルを手中にしたのがアンクルモーだ。

キーンランンド9月1歳市場にて馬主のマイク・リポール氏に22万ドルで購買され、名門トッド・プレッチャー厩舎の一員となつたアンクルモー。2歳時の戦績3戦3勝。G1シャンパンS(d8F)を4.3馬身差、G1BCジュヴェナイル(d8.5F)を4.1/4馬身差という圧倒的強さで制し、全米2歳牡馬チャンピオンに選出されている。当然のことながら、ケンタッキーダービーの最有力候補となつたが、3歳2戦目となつたアケダクトのG1ウッドメモリアルS(d9F)で3着に敗れて連勝がストップ。レース後の獣医検査で感染性の腸炎に罹患していると診断されたが、軽症ということで調教は継続されてケンタッキーダービーを目指したもの、そこからの3週間で体重が30キロも減少。ダービー出走を断念し精密検査を行つたところ、肝胆管炎というサラブレッドには

極めて珍しい疾病を発症していることが判明し、春の3冠を断念して休養に入ることになった。休み明けのG1キングズビショップS(d7F)で鼻差2着となつて実力を示した後、G2ケルソH(d8F)に優勝。G1BCクラシック(d10F)は距離が長かつたか大敗を喫して、現役生活を終えている。

12年に、この年の新種牡馬としては最高額となる種付け料3万5千ドルが設定されてアッシュフォードスタッフで種牡馬入り。211頭もの繁殖牝馬を集める人気を博し、13年に生まれた167頭の初年度産駒が15年に2歳となつたわけだ。

その中から、G1BCジュヴェナイルなど3つのG1を含めて5戦5勝の戦績を残し、父同様に全米2歳牡馬チャンピオンの座についたナイキリストや、G1アルシバイヤデスS勝ち馬ゴーモー、G1ホープフルS3着馬アンクルヴィニーらが登場。1月末に発表された北米版の2歳馬ランキン

グ「イクスピリメンタルフリーハンデ」では、10頭の産駒がランクイン。8頭ずつを送り込んだタピットとスキャットダディを上回り、種牡馬別の最多ランクインを果たしたのである。

アンクルモーの父は、オーブン特別ヒヤシンスSを制したチャーリーブレーヴ、グリーンファーム所属馬で重賞戦線に顔を出したワールドアベニューなど、日本でも活躍馬を出したインディアンチャーリーである。そしてアンクルモーの母の父は

ロベルト系のアーチで、日本で活躍馬を出しておかしくない背景を持つた馬だが、上質のアンクルモー産駒を導入するには相当の予算を組まないと、かないそうもない状況となっている。

MSでラオバンが3着になるなど、攻勢を強めている。

15年には2万5千ドルに下がった種付

料も、初年度産駒の活躍を受け、今季は7万5千ドルという高額での供用となつてゐる。

こうなると、自ずと高くなるのがマーケットにおける評価だ。北半球の1歳市場における産駒の平均価格は、14年が6万8111ドルだったのに対し、15年は11万5613ドルに上昇。まだ、初年度産駒の本格的な活躍が始まる前だつたにもかかわらず、である。

北半球はこれから、2歳トレーニングセールの季節に突入する。その幕開けとなるファシグティプトン・フロリダ2歳セールには、7頭のアンクルモーがスタンバレーしており、争奪戦の激化は必至の情勢だ。

アンクルモーの父は、オーブン特別ヒヤシンスSを制したチャーリーブレーヴ、グリーンファーム所属馬で重賞戦線に顔を出したワールドアベニューなど、日本でも活躍馬を出したインディアンチャーリーである。そしてアンクルモーの母の父はロベルト系のアーチで、日本で活躍馬を